The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「感情教育」におけるクロノロジーとフローベールのレアリスムについて
Author(s)	中島, 真由美
Citation	Gallia. 1968, 8, p. 67-90
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3806
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「感情教育」におけるクロノロジーと フローベールのレアリスムについて

中島真由美

（1）

既に Ernest Bovet が，**Revue d'Histoire littéraire de la France** 誌上，"Le Réalisme de Flaubert" と題した小論文において，「ボヴァリー夫人」の年代を中心とした興味深い考証を行っている[1]。それは，作品の年代をつぶさに追ってゆくことにより，そこからフローベールのレアリスムのいかなるものかを明らかにしたものである。私はそのやり方を同じ現代小説である「感情教育」に適用してみようとした。特にこの作品の中では，七月王政から二月革命を経て第二共和制，第二帝政へとめまぐるしく移りかわる社会情勢を背景として，力を浪費し消耗してゆく一世代の歴史が描かれているところから，フローベールにおいて可能なこの方法によって作品をとらえることが，彼の創作態度を理解する一つの有効な手がかりとなるように思われたのである。

（2）

まず私は「感情教育」に描かれる事件が一つの事実であったと仮定し，その年代を決定しようとした。この小説は巻頭から，≪1840年9月15日，朝の6時頃，出帆まぎわのヴィル＝ドゥ＝モントロー号がサン＝ベルナール河岸の前で，もくもく煙のうずを上げていた。≫という文章で始まり，それ以後の年代は作者の直接間接の指示によって決定される。特に第2部から第3部にかけては，小説内の事件の日時は大部分，そこに描かれるさまざまな歴史上の事実に基いて判断された。小説というものが本来一つの虚構であり，現実社会とは違ったそれ自身の時間や空間を持つと考えるなら，こうしたやり方は，次元の異なる二つのものを関係づけようとする無謀な仕事のように思われる。しかし，この作品の持つ年代記的性格と，作者フローベールがこれを執筆するにあたって行った綿密周到な歴史資料の

調査は，私のこのやり方を正当化してくれるだろう。

こうして年表を組みたててゆくことにより，「ボヴァリー夫人」においてと同様「感情教育」においてもフローベールの犯した意外な誤りや矛盾を発見することになった。それらの誤りが何故生じたかを追究しながら，フローベールの創作態度のある一面を理解することができればと思う。

ここに，作品中特に重要と思われる事件及び，後の考察に必要な事件の年代をとりあげながら，その主な流れを記しておこうと思う。（年表中の(A)，(B)及び(1)から(5)迄の番号はその個所に年代上の誤り，矛盾のあることを示す）なお，それぞれの年代の設定理由について詳しいことは後に附する年表を参照してほしい。

*

第1部

1840年　9月15日．フレデリックとアルヌー夫人の最初の出会い。
　　11月半．パリでの学生生活始まる。

1841年　1月（2月？）無為と倦怠。法学への嫌悪。ある夜，パレ・ロワイヤル座で二人の女を連れたアルヌーを見かける。
　　春．試験の準備にとりかかる。
　　夏．試験の後，ノジャンへ帰省。
　　12月．ユソネに連れられ〝工芸美術〟を訪れる。≪去年の夏，パレ・ロワイヤル座で見た女≫に会う――(A)。

1842年　1月．アルヌー夫人と再会。
　　夏．第二回の試験に失敗。
　　冬．アルヌー夫人への想いは一層強まる。12月末，第二試験に合格。

1843年　2月．第三試験に合格。
　　初夏．サン・クルーの別荘でアルヌー夫人の誕生日祝いの晩餐。
　　8月．最後の試験に合格。帰省した翌日≪12才位の小娘≫ルイズを見る――(1)。家の経済事情により，ノジャンに留まる。絶望から諦めへ。

1845年　夏．叔父の訪問。
　　12月12日．叔父の死によって思いがけぬ遺産を相続する。14日，パリへ出発。

第２部

1845年　12月半．パリ到着。≪３才位の男の子を膝にのせた≫アルヌー夫人と再会――(2)。４日後，アルヌーに連れられ娼婦ロザネットの舞踊会へゆく。

（１年の空白）――(B)

1847年　１月．ダンブルーズ家の招待日。翌日，アルヌー夫人を訪問。次の日曜，フレデリックの転居祝い。アルヌー家の経済的なゆきづまりを知る。アルヌー夫人とロザネットの家へ同時に出入りし始める。

４月初．アルヌーの訴訟の件で，夫人がフレデリックを訪問。

７月末．ルイズとの結婚を考える為ノジャンへ帰る。≪１年たらずの間に≫大きく変化したルイズと再会。

秋～冬．オトゥイユの別荘での打ち明け話を通じ，夫人との精神的な結びつきが強まる。

1848年　２月半．夫人と密会の約束をかわす。

２月22日．子供の病気の為，夫人は約束の場所に来ない。

２月23日．キャプシーヌ街流血の惨事。同夜，ロザネットはフレデリックの愛人となる。

第３部

1848年　２月24日．二月革命。共和制宣言。

６月22日．国民職場閉鎖布告によって暴動が惹起される。（六月事変）

６月23日．ロザネットと共にフオンテーヌブローへ出発。

６月25日．デュサルディエの負傷を知りパリへ戻る――(3)。

７月初．ダンブルーズ夫人と親しい言葉をかわす。

1849年　１月末（２月初？）．ロザネットの妊娠。

５月．ダンブルーズの私生児セシルと夫人の愛人マルチノンとの結婚。翌日，フレデリックはダンブルーズ夫人に愛を告白。同日，オーブ県の代議員に立候補を決意。

冬．ダンブルーズ夫人との関係は周知のこととなる。

1851年　１月半．ダンブルーズ氏の病気。

２月12日．死去。夫人とフレデリックは結婚の約束をかわす。13日，埋葬。

2月14日．夫人に遺産のない事が判明。同日，ロザネット出産——(4)。

2月末．新候補出現により代議員立候補を断念。

秋．子供の死。一方アルヌーは経済的な窮地に陥り，夫人と共にパリを離れる。

11月末．ロザネットとの離別。

12月1日．ダンブルーズ夫人とも離別。

12月2日．ルイ・ナポレオンのクーデタ。

12月4日。ノジャンへ帰り，親友デローリエとルイズの結婚式の行列に出会う。

1867年　3月．アルヌー夫人が最後の別れに訪れる。

冬．結婚に破れたデローリエとの回想。

*

以上が「感情教育」の年代表である。フローベールの誤りや矛盾は，それと分るようにできうる限り忠実に年表の上に書き入れてあるが，そのうち(A)，(B)で印したものは，年表製作の段階において取り扱わねばならなかった問題である。上の年表を基にして個々の年代上の誤り，矛盾を説明してゆく前にまずその問題の二個所を明らかにしておかねばならない。

(A)　まず年表では1841年の1月を見てほしい。そこに，〝ある夜，パレ・ロワイヤル座で二人の女を連れたアルヌーの姿を見かける。〟と書きこまれている。しかしこの事件の時期は，もしフローベールの指示に忠実に従うとすれば，1841年夏と設定されねばならない。というのは，その後（年表では1841年12月）フレデリックが〝工芸美術〟を訪れたとき，≪去年の夏，パレ・ロワイヤル座で見た女≫に会う場面があるからである。だから私の製作した年表で1841年春となっているところは1842年春となり，その後フローベールからの明確な指示のある1845年夏まで1年づつのずれが起ってくることになる，しかし私があえてこの≪去年の夏≫という指示を無視したのは，主に作品の他の部分との内容的な関連に基いてである。この事件の描写の前には，≪新年には……≫とか，≪冷たい風がほこりを吹き上げる≫とかいった冬の描写があり，ひきつづき何ら季節の変化を示すよ

うな表現もなく≪ある夜，パレ・ロワイヤルで……≫という記述が現われ，それは直接，≪冬は過ぎた。春には少し気分も明るくなって……≫という文章に続くのである。とすればこのパレ・ロワイヤル座の事件は冬に起ったものとみなすことができるのではないだろうか。

さて Gérard Gailly がその著書 **L'Unique Passion de Flaubert** の中で，この時期のフレデリックの描写には多分にフローベール自身の経験の挿入されているとして次のように言っている。≪1841年1月フレデリックは，パレ・ロワイヤル座でアルヌーが帽子に喪章をつけているのを見て，夫人が死んだのではないかという不安から，翌日〝工芸美術〟の店員に問い正す場面があるが，ここの描写では，つい4ケ月前アルヌーと会い友達のように親しくされていたフレデリックにしてはあまりに態度が内気で臆病すぎる。しかし実際にフローベールがシュレザンジェ夫人と再会したのはトゥルヴィルで初めて彼女に会ってから4年後（1840年）であったことを考えれば，このフレデリックの内気な態度が彼自身の体験からでたものとして理解される。又この喪章のエピソードも，事実1839年シュレザンジェの父親が死亡していることから，全くの作り話とも考えがたい[2]。≫ Gailly は上記のようにこの事件の時期を1841年1月と断定しており，それは私の年表ともほぼ合致する。おそらく Gailly も前後関係からそのような判断を下したと思われるが，後にでてくる≪去年の夏≫という言葉には気づかなかったのであろう。

しかし何故フローベールは≪去年の夏≫という，年代の流れの真実性を犯すような指示を与えたのだろうか。Gailly の言うように，このパレ・ロワイヤル座でのできごとがフローベール自身の体験から生みだされたものとするならば，その季節が夏であったと仮定することも可能であろう。フローベールは1840年8月，大学入学資格を得ているのであるから，その頃パリでこのような場面に遭遇したことは十分考えられることだと思う。その時の〝夏〟の印象が，この場面の描写に際して，フローベールの内に蘇っていたのではないだろうか。

以上のような考証から，結局パレ・ロワイヤル座でのできごとの時期を1841年冬に設定したのである。しかしそうすることによって後の年代にずれが生じたのは事実であり，それは1844年という1年間が空白のまま残されるという結果となって現われてくる。だがこの場合，1年間の空白は1841年か1844年のいずれかに生じるのであり，それは避けえないことであ

った。私はこの二者択一にあたって，Gailly の考察も取り入れ，内容的に自然である方を年表の中に書き入れたのである。

(B) もう一つの問題点は第2部の初めにある。ここでは，ノジャンから再びパリへやってきたフレデリックの姿が描かれている。12月16日，アルヌーの家を訪れ，4日後アルヌーに連れられロザネットの舞踊会へゆく。その翌日の描写の後，すぐ章が変ってフレデリックが新しく買い入れた家についての説明があり，その後ダンブルーズ家の招待日を経て転居祝いの描写へと続いてゆく。故に内容を追ってゆけば，この転居祝いの時期は1846年1月（何故1月と設定したかについては附記年代表参照）となるべき筈である。ところがその時の話題にでてくる〝ビュザンセの暴動と食糧飢饉[3]〟，〝スペイン王室の結婚[4]〟，〝ロシュフォールの公金濫用[5]〟，〝サン・ドゥニ新僧会[6]〟等のできごとは全て，1846年10月以降の事件であり，これは，転居祝いの時期を1847年1月に設定して初めて時期的な一致をみることができるものである。しかしながら，ダンブルーズ家の招待日の翌日，アルヌー夫人を訪れたフレデリックが，夫人から「うちの人，先日あなたを舞踊会にお連れしたでしょう。」と聞かれる場面があるところから，それがロザネットの舞踊会から1年も後のことであるとは考えられない。明らかにフローベールのあやまりである。彼は無意識に1年間をとびこしてしまっているのであり，それは次の事からも証明される。

1847年1月ダンブルーズ家の招待日の同日アルヌー夫人を訪れたフレデリックが子供マルトに向かって≪3年の間にずいぶん大きくなりましたね。≫と話しかけるところがある。マルトには1843年初夏，夫人の誕生日祝いの日以来会っていない。故に，年代的に考えれば≪4年の間に≫となるべきところである。しかしフローベールが自分で作ってしまった1年間の空白に気づいていないとすれば，つまり内容的なつながりから判断するなら≪3年の間≫で全く正しいことになる。又，1847年8月，北部鉄道の株の下落によって財産も少なくなったフレデリックは母に勧められているルイズとの結婚を考える為，ノジャンへ帰り彼女と再会する。そこで，≪1年たらずの間にこの少女にこんなにも変化の起ったことがフレデリックを驚かせた。≫という文章がでてくる。ここでも年代から見れば≪2年たらず≫となるべきであろうが，内容的に見て1年で良いことは上の場合と同様である。

しかし，彼自身1845年12月末迄の年代を明示しておきながら，何故一足

とびに1847年1月まで進んでしまったのか。私はそこに歴史小説を書こうとしたフローベールの意図を感じるのである。彼にとって，飢饉や暴動，対外政策の失敗等，激動を続ける1846年末から1847年にかけての一時期は，フレデリックのパリでの新しい生活を出発させる為の必要条件であったと思われる。特に転居祝いの場で一堂に会した友人たち――社会主義革命家セネカル，誠実な庶民であるデュサルディエ青年，上流階級の子弟シジーなど――を通して，大きく揺れ動く七月王政末期を生きる若者の観念なり思想を描きだすこと，又それによって今後歴史の波に流されてゆくフレデリックの未来を予測させることは，フローベールの大きな狙いであったと言えるだろう。

（3）

以上が，年表を製作してゆく段階で生じた疑問点である。さてこうして整理され決定された年表には更に合計五つのあやまりが発見された。それらは勿論無意識のものであるが，フローベールの場合そこに何らかの動機があるように思われる。順次説明を試みてゆこうと思う。

(1) 1843年8月，フレデリックがノジャンへ帰った翌日，≪12才位の小娘≫ルイズを見る。ところが後の説明によれば，≪1834年頃≫ルイズの父ロックが彼女の母親である人をパリから連れ帰り，その後に彼女が生れたとある。とすれば，ルイズの年はこの時10才にも満たない筈である。フローベールが〝12才〟と断定している訳ではないので，一概に彼の誤りであるとするのは無理なことかもしれない。それにしてもこの〝12〟という数字はどこからわり出されたのか？私はフローベール自身の過去にその解答を求めようとした。

ルイズは，フローベールの作品に登場するただ一人の若い娘であるが，その原型となっているのは，彼が少年時代に知り合った英国人の姉妹である。可憐な彼女達の姿は，厳正な意味でフローベールの自伝と考えられる「狂人の手記」の一章をさいて描きだされている。≪年かさの方が15才，下はようやく12才で，ちびの痩せっぽちだったが，その眼は姉よりもずっと生き生きして大きく美しかった[7]。≫ 実際にルイズのような愛情をもってフローベールを慕ったのは，姉娘ジエルトルュートの方であったというが，≪ほっそりした筋肉質の体とすきとおる青緑色の瞳[8]≫ をもって

いたルイズの姿は，≪小柄でやや太り気味≫であったという姉娘より≪12才位の，痩せっぽちでその眼が美しかった[7]≫ 妹娘アンリエットの方により近いと思われる。しかしジエルトリュートとの初恋の思い出が，ルイズの幼い愛情の描写に大きく影響していることも否めない。≪ある日，すこぶる曖昧な姿勢で僕の長椅子の上に寝そべった≫り，≪別の時には泣きながら僕に接吻した[9]≫ ジエルトリュートの姿は，≪寝床の上に横たわり，「あなたの奥さんのような気がするわ。」と言う[10]≫ ルイズや，別れの日，≪すすり泣きながら，フレデリックを夢中で胸の中に抱きしめた[11]≫ ルイズの姿を想い起させる。

以上のことから次のように言うことができよう。ルイズはその容姿においてアンリエットの姿をしのばせ，その愛情の姿においてジエルトリュートをしのばせる，と。このような考察よりフローベールの小さな誤りを理解できるのではないだろうか。

(2) 1845年12月半，ノジヤンから再びパリにでてきたフレデリックは，≪おおかた3才位の男の子を膝にのせた≫懐しいアルヌー夫人と再会する。ここでも問題は子供の年である。フレデリックは1843年初夏，夫人の誕生日に≪いらだった様子の≫彼女を見て以来，夫人と会う機会はなかった。であるから，子供が生まれたと考えられるのは早くても1844年初めの頃である。そうすると，子供は今2才にもなっていないことになる。ここでもフローベールはフレデリックの視点を通して≪3才位≫と想像しているのであり，断定している訳ではない。しかし一応，私が創作中のフローベールの立場にあるとして説明を試みたいと思う。

後に触れるロザネットの子供の挿話にしても，又「ボヴァリー夫人」におけるエンマの子供のそれにしても，フローベールは常に作品の主人公の心理や行動をよりよく描きだす為にのみ，こうした挿話をひきあいにだすという傾向をもっているが，ここでも又，≪アレクサンドル酒場の息子のように頭をかきむしって泣く[12]≫ この3才位の男の子は，フレデリックのアルヌー夫人に対する幻滅をかきたてる一つの大きな条件となっている。その為には，アレクサンドル酒場で見た≪4才位のやんちゃ小僧≫の残像と，アルヌー夫人の側で泣きわめく子供の像が，フレデリックの頭の中で重なり合う必要があったのである。実際には2才になるかならぬかの子供の年を≪3才位≫と描写したフローベールを，私はこのように弁護したい。

以上の二つに加え，これからとりあげようとする三つの年代的誤りは，フローベールの創作態度を理解してゆくうえに特に興味深いと思われる。これらはすべて第3部において発見されたものであり，又，後の二つは既に Goseph Pinatel によってとりだされていたものであるが[13]，それを参考にしながら私なりの考察をすすめてゆきたいと思う。

(3) フォンテーヌブローでの滞在期間。1848年6月「国民職場」の閉鎖布告がだされたその翌日（歴史資料から6月23日と決定），フレデリックはロザネットを伴ってフォンテーヌブローへ行き，日曜日の朝（6月25日）友のデュサルディエが暴動で負傷したことを知りパリに戻る。故にその滞在期間は僅か2日ということになる。ところがそこでのフレデリックとロザネットの跡をつぶさに追ってゆくと，少なくとも1週間は滞在していたことが判明する（附記年代表参照）。何故このような矛盾が生じたのだろうか？私は次のように考えてみた。

第一に，6月22日の布告によるパリ民衆の暴動によってフレデリックの出発を動機づけること，又六月暴動による善良な友デュサルディエの負傷という事件によってフレデリックを再びパリの騒乱の中へ連れ戻すこと，更に25日夜パリへ戻ってきたフレデリックの眼を通して，この陰惨な斗いの未ださめやらぬパリの街を描きだすこと，これらは歴史小説家フローベールにとっては曲げることのできない要求であったということである。

次に，この滞在を通じてフレデリックとロザネットの心のふれあいを十分に，自然な形で描きだすことも又，フローベールの要求するところであった。フォンテーヌブローの描写はこの作品中，最も美しいものであるが，彼はこの場面を描く為には学生の頃滞在した時の記憶だけでは満足できず，再びフォンテーヌブローを訪れるという熱意さえ示している。その時に書き留めたと思われる≪Notes de mon carnet≫には，作品中のフォンテーヌブロー描写の原型ともいうべきものが，非常に簡明なしかも生き生きとした形であらわされている。≪前景は多く影の中におかれ，背景は明るく照らしだされる。……哀調をおびていながらも明るい笑みをたたえている自然。……孤独は感情を高ぶらせ――野生的な本能を蘇らせる。……青葉のうねり――鳥瞰的な遠近法――そして雨あがりのすがすがしさが感じられる。官能の流動は草花，昆虫，鳥そして蝶をさえ活気づけている[14]。≫何度となく手を加え書き改めたこの場面の描写をやっと終えた頃，フローベールは George Sand に宛てて≪これらの木の一つに首を吊ってしまい

たいような気を起させた[15]。≫と，その苦労を物語っている。結局フローベールにとって，ここで最も重要だったこと――それは，初夏のフォンテーヌブローの森の中で，フレデリックとロザネットの自由な自然のままの姿が心地よい幸福感からさわやかな感動を生み，ほのぼのとしたうちあけ話となってあらわれることであった[16]。その為に彼らの滞在はフローベールの気づかない間に一日一日と延ばされていったのである。

以上のような二つの要求が互に主張しあった結果，滞在日数の矛盾が生じたといえる。しかし本来の目的はただ一つなのであり，それは作中人物の心理や行動に真実性と必然性を与えることである。フローベールはその為に，一つ一つの場面においてドラマに完璧な舞台と情況を設定しようとしたのである。

(4) ロザネットの妊娠期間，1849年1月末，フレデリックはここ1年近く離れていたアルヌー夫人を訪れる。二人の愛情が穏やかな感動の内に蘇ろうとした時，突然ロザネットが現われる。夫人の前で彼に慣れ慣れしい口をきき夫人を絶望と恥辱の中に陥れたロザネットに対し，フレデリックは≪しめ殺してやりたい[17]≫程の憤りを感じる。本来ならここでロザネットとの決定的な離別が見られたはずである。ところがこぶしを振り上げたフレデリックに彼女の妊娠の事実が告げられるのである。

しかしそれ以来彼女のあらゆる無知，趣味の悪さ，怠け癖が彼にとってはたまらないものとなり，一方ではダンブルーズ夫人へと惹きよせられてゆく。そして1850年5月，夫人の愛人であったマルチノンの結婚式の翌日，ダンブルーズ夫人に愛を告白しての帰り道，彼は心の中でこうつぶやく。≪この社会で一流の地位を占めにはこういう女性であれば十分だ[18]。≫二人の関係はまもなく周知のこととなり，≪その冬中ダンブルーズ夫人は彼を連れて社交界をあちこち出入りした[19]。≫やがて夫人に対する感情もさめ始めるのであるが，彼の野心にとって最大の踏み台である彼女と離れてしまうこともできないまま，以後1851年1月ダンブルーズの病気，2月12日その死，13日埋葬，そして14日全財産を私生児セシルに与えるという彼の遺書の発見等，事件があいついで起る。さまざまな夢想，夫人との結婚によって可能と思われていた豪奢な生活もすべて彼から去っていったその同じ日，ここではじめてロザネット出産という事件が入るのである。それは妊娠の告知から何と2年を経た日のことである。この誤りについても次のように説明できるのではないだろうか。

フローベールはまず，ロザネットに嫌悪を感じ始めているフレデリックをなおしばらく彼女に結びつけておく為に妊娠という事件を利用し，それによって彼の生活の複雑さを描いてゆこうとした。ところがここでフローベールは，フレデリックに起った社会的野心と，それに基づくダンブルーズ夫人に対する感情の動きを一貫して描くことに終始し，その為に，ロザネットの妊娠という事実は顧みられないことになったのである。そしてダンブルーズの死後，当てにしていた遺産も他人の手に渡り，茫然としている夫人と≪体面上≫結婚せねばならなくなったフレデリックの堕落は，それまで忘れられていたロザネットの出産という事件が加わることによって一層明確なものとなっている。ここにフローベールの計算があるように思われる。結局フローベールは，最後までアルヌー夫人，ロザネット，ダンブルーズ夫人に三分されたフレデリックの感情的堕落を真実性のあるものとして描きだす為にのみ，この子供の挿話を用いたとみて良いであろう。

(5) 代議員の空席期間。1850年5月，ダンブルーズ夫人に愛を告白しての帰り道，フレデリックは友人デローリエから，二重選挙の結果オーブ県に代議員の空席があることを教えられ，立候補を決意するのであるが，まずここに曖昧な点がある。この二重選挙というのが1849年5月13日の立法議会総選挙の際行われたものであるならば，1年後に未だ空席があるとは思えない。(Lamartine, Jules Favre 等は1849年末の補欠選挙で選出されている。）更にこの空席期間が1年近くも続いていることに第二の疑問がある。フレデリックが立候補の決心をしてから数日後，デローリエは夫人によって署名されたダンブルーズの推薦状をもってくる。しかしフレデリックはそれよりも≪金持の女を自分のものにする喜び[20]≫に夢中であり，社交界の楽しみに心を奪われている。そして1851年1月〝一度ノジャンへ帰ってくるように〟という友人の言づてを受けとりやっと出発しようとするのだが，ダンブルーズの病気の為それもできないまま，1851年2月12日ダンブルーズは財産のすべてをセシルに残して死んでしまう。ついでロザネットの出産があり，その数日後いよいよノジャンへ発とうとしたその時デローリエから≪二人の新候補者が現われたため，当選の望みはない≫という手紙を受けとるのである。それは立候補を決意してから約1年後のことになる。何故このようなやり方で代議員の空席期間がひきのばされたのであろうか。ここにも又，フローベールの二つの要求がうかがわれる。

まず1850年5月，ダンブルーズ夫人への愛の告白，夕食の約束という事

件のあった直後，そのことによってフレデリックの胸に政治的野心を燃え上らせるという要求。第二にダンブルーズという大ブルジョアの死によって一人の若者の政治的未来が完全に打ち砕かれる姿を描きたいという要求がある。≪ダンブルーズ氏の顔をたてて彼に投票したと思われる多くの連中も，今となってはもう顧みないであろう。[21]≫ それこそフローベールが導きだそうとした帰結なのであり，その為にこの空席期間の延引が余儀なくされたのであろう。

以上三つが「感情教育」において発見された年代上の誤りのうち，特に注目に価するものである。次に「ボヴァリー夫人」におけるこうした誤りの代表的な例を一つひこうと思う[22]。

1840年3月(第1部終り)，トストを発ってヨンヴィルに向かった時，ボヴァリー夫人は妊娠していた。そしてその出産は，いぼたやおおいぬふぐりが花盛りになる頃(5. 6月)の約6週間前と設定され，エンマの妊娠から子供の誕生まで13ケ月の月日が流れたことになる。どうしてこのような誤りが生じたのか。Ernest Bovet は， 次のように説明している。

フローベールはまず第1部の終り，引越しの用意をする際見つけた結婚の花束を火に投げずてるエンマの精神的苦痛を，彼女の妊娠の事実と重ね合わせることによって，より印象的に描き出そうとした。次にフローベールが要求したことは，町はずれの乳母の家に通うエンマとレオンの初めての散策が初夏のよく晴れた日，花盛りの垣根に沿うて行われることであり，更に，床を離れてまもなく未だ弱々しく青白い顔色をしたエンマが内気なレオンの腕に支えられることも必要であった。この情景は，執筆以前からフローベールの頭の中に一枚の完璧な tableau として保存されていたものであり，そのどの部分をも削りとることはできなかったのである。

この「ボヴァリー夫人」における誤りについても，又「感情教育」におけるそれについても，その個々の場合に与えられる直接的な理由はさまざまであるが，結局その場その場の人物の心理的な描写に固執したフローベールが，時間的に継続した外的な事件のあるものに対しては近視眼となっていた結果生じたものであると言えよう。根本的にはそれは人物の行動や心理を外界との調和の中に描いてゆこうとするフローベールの姿勢からくるものと思われる。その事はフレデリックの感情生活ひとつを取り上げて

みても言える事であり,≪彼にとって心の本質，生命の奥底のようなもの≫であったアルヌー夫人との清純な恋愛，憐憫と官能の交錯するロザネットとの恋，偶然と利害の感情に基いたダンブルーズ夫人との恋，これらのそれぞれ性質の異なる恋愛感情の推移は，次に見る如く，背景をなす歴史的事件と密接に結びつけられているのである。

アルヌー夫人に対する愛情は常にフレデリックの心の底に，宗教的なプラトニックな愛として存在していた。しかしこの貞潔な夫人にも，もし子供の病気という障害がなければ身を誤ったであろうと思われる日がある。それが1848年２月22日のことであり，その翌日彼は≪憎悪の生んだ鋭い機智と，心の中でアルヌー夫人をあくまで辱しめたい気持から，その人の為に用意しておいたトロンシェ通りの部屋へ≫ロザネットを連れてゆく。ここで注意すべきことは，フレデリックにこのような行動を決意させたものが二月革命の端緒となるキャプシーヌ街惨劇の銃声であったということである。二月革命という一つの歴史的事件が，彼の感情生活における革命を惹起したと言えよう。ところがこのロザネットとの関係に≪妻を迎えた新婚の喜びのような気持≫を味わっていたフレデリックの心もやがて，大銀行家の妻，ダンブルーズ夫人へと移ってゆく。彼が初めて夫人とうちとけた言葉をかわすのは六月事変の直後のことである。六月事変は，６月22日に発布された「国民職場」の閉鎖布告から誘発された労働者と反動勢力の斗いであり，結果としてブルジョアジーの労働者階級に対する勝利を示したものであった。そして1850年５月，ダンブルーズ氏の私生児セシルと，夫人の愛人であったマルチノンの結婚を機として，彼は夫人の愛人となるのであるが，この関係も又，1851年12月１日にアルヌー夫人のことが因で絶たれる。それはブルジョア共和制をくつがえし，フランス社会を再び帝政へと逆行させたルイ・ナポレオンのクーデタの前日のことであった。

以上のようにフレデリックの感情生活における変化の時期と性質は，その背景となる歴史的事件によってより明確な裏づけを与えられているのである。

（４）

ここで年代を離れて，このようなフローベールの要求を最もよく示している一つの現象を例にひいてみたい。それによって年代上のあやまりから推測されたフローベールの創作態度がより理解されやすいものになると思

われる。

それは登場人物の同じような心理や行動の描写に対して，何度か同じような場面や情況が用いられるという現象である。Ernest Bovetは「ボヴァリー夫人」の中でエンマの堕落が常に落日の描写と結びつけられていることを指摘している[23]。「感情教育」においても，アルヌー夫人のさしだす手というものがフレデリックの感情を象徴化する一つの道具として何度となく用いられていることがあげられよう。その結果アルヌー夫人の手とロザネットの手を混同するというまちがいさえ犯しているのである[24]。

それは作品の終り近く，アルヌー夫人が最後の別れを告げにフレデリックを訪れた時のことである。どうして彼の愛情に気づいたかと聞かれた彼女はこう答える。≪あなたが私の手首に，手袋と袖口のあいだに接吻なさった晩でした。[25]≫ しかし小説中にこの場面はない。よく似た場面が一個所あるがその手はアルヌー夫人のものでなくロザネットのものなのである。ロザネットと競馬を見に行った日，彼は金の腕輪をほめながら≪彼女の腕首をとって彼の唇を手袋と袖口のあいだにおしあてた[26]≫ という場面がそれである。

こうした現象は「ボヴァリー夫人」と「感情教育」の二つの作品を通しても発見される。それはアルヌー夫人の受胎の時期を定めるにあたり気づいたことである。その時期は大体サン・クルーの別荘で夫人の誕生日を祝った頃と推定されるのであるが，そこに次のような場面がある。≪そこへアルヌーがばらをとりに庭へおりてきた。花束を紐でしばり……大きなピンでしっかりとめてから，少し情のこもった面持で妻にさし出した。……が，彼女は小さくあっと言った。うかつに差してあったピンで手をついたのだ。……夫人は花束を馭車台のそばの革膝掛けの中におしこんだ。……何かいらだっているふうでことごとに気にさわっていた。そのうちマルトが眼をつぶってしまうと，彼女は花束をひき出して，窓から投げてしまった。[27]≫ 次に先程あげた「ボヴァリー夫人」における花束の場面を再び見てみよう。≪ある日，出立を見越してひきだしのなかを整理していると，彼女は何かで指をついた。結婚の花束についている針金であった。……エンマは花束を火に投じた。それは乾いたわらよりもはやく燃えあがり，やがて炭の上に真紅の草むらとなってじりじりとむしばまれた。……三月，トストをたったときボヴァリー夫人は妊娠していた。[28]≫ この二つの描写の中に，花束によって象徴された一つの女性の心理——夫に対する不信

感と軽蔑の念をどうすることもできず，しかも妊娠という事実を身にせおった不幸な女性の心理が存在しているのである。

（5）

フローベールはこの作品を執筆中(1866年12月) Royer de Genette に宛てて次のように書き送っている。≪美は現代生活と両立しません。だからこんなものにかかわり合うのは今度が最後です。もう沢山です。[29]≫しかし私は次の Thibaudet の言葉を借りて反駁したい。≪「感情教育」を読み終えた時心に残るものは固有の持続をもって流れてゆく人間世代のイメージであり，去りゆく人を巻き込み運んでゆく水の流れのイメージである。そしてこの作品の叙述が感嘆に価するのは，まさにこういった印象の為なのだ。[30]≫ そこに我々は一つの美しさを感じるのである。現実から出発していながら，より高い次元においてそれを一つの美に昇華させたこと，ここにフローベールのレアリスムの偉大さが存在すると思われる。

レアリスト，フローベールの求めたものは決して現実の月並な模写や露骨な生活描写ではない。それは，人間の動き（特に内面的な動き）とそれをとりまく情況との完全な調和から生れる美しさである。彼が行った現実の正確な観察，厳密な資料調査，そして，自分自身の想像力や過去の経験，それらはすべてそのためにのみ存在するのである。

しかし「感情教育」の年代を詳細に検討することによって，さらに次のようなことが証明されたように思う。即ち，この調和に対するフローベールの要求は，作品全体よりもひとつひとつの場面の描写において，より強くあらわれているということである。ここでとりあげた年代上の誤りや矛盾はすべて，フローベールのそうした態度から必然的に生じた結果とも言えるのではないだろうか。

NOTES

(1) BOVET (E.), "Le Réalisme de Flaubert", *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 1911, p. 1-36

(2) GAILLY (G.) *L'Unique passion de Flaubert*, Paris, Le Divan, 1932, p. 63

(3) ≪les meurtres de Buzançais et la crise des subsistances.≫ Pendant l'hiver de 1846-1847, des troubles provoqués par la disette éclatèrent dans l'Indre. (Note de l'édition Garnier).

(4) ≪les mariages espagnols.≫ La politique étrangère de Louis-Philippe qui

maria son fils, le duc de Montpensier, à l'une des filles de la reine d'Espagne, Marie-Christine; l'autre fille épousa don François d'Assise. Ces mariages furent célébrés le 10 octobre 1846. (Note de l'édition Garnier).

(5) 《les dilapidations de Rochefort.》 Scandale administratif qui éclata en 1847 à l'arsenal de Rochefort. (Note de l'édition Garnier).

(6) 《le nouveau chapitre de Saint-Denis.》 Un nouveau projet de réorganisation du chapitre de Saint-Denis avait été adopté par la Chambre des pairs au début de 1847. (Note de l'édition Conard).

(7) "Mémoires d'un Fou", *Ecrits de Jeunesse*, Lausanne, Rencontre, 1964, p. 291

(8) *L'Education sentimentale*, Conard, p. 129

(9) "Mémoires d'un Fou" *Ecrits de Jeunesse*, Rencontre, p. 296

(10) *L'Education sentimentale*, Conard, p. 136

(11) *Ibid.*, p. 143

(12) *Ibid.*, p. 360

(13) PINATEL(J.), "Notes vétilleuses sur la Chronologie de L'Education sentimentale," *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 1953, p. 57-61

(14) 《Parfois le premier plan dans l'ombre et les fonds éclairés—Nature à la fois mélancolique, riante. ... La solitude pousse à la révolte—renaître l'instinct sauvage ... houle de la verdure, perspective à vol d'oiseau, sentir de la pluie nouvellement tombée. Un fluide voluptueux anime plantes, fleurs, insectes, oiseaux, papillons. ("Fontainebleau", Notes de mon carnet, *L'Education sentimentale*, Conard, p. 638-639)

(15) *Correspondance*, Conard, t.v, p. 404

(16) Voici quelques exemples.

《Il se croyaient loin des autres, bien seuls.》 (*L'Education sentimentale*, Conard, p. 465)

《Debout, L'un près de l'autre, sur quelque éminence du terrain, ils sentaient, tout en humant le vent, leur entrer dans l'âme comme l'orgueil d'une vie plus libre, avec un surabondance de forces, une joie sans cause.》 (*Ibid.*, p. 466)

《Le sérieux de la forêt les gagnait; et ils avaient des heures de silence où, se laissant aller au bercement des ressorts, ils demeuraient comme engourdis dans une ivresse tranquille.》 (*Ibid.*, p. 468)

《Il ne doutait pas qu'il ne fût heureux pour jusqu'à la fin de ses

jours, tant son bonheur lui paraissait naturel, inhérent à sa vie et à la personne de cette femme.》 (*Ibid.*, p. 469)

(17) *Ibid.*, p. 515

(18) *Ibid.*, p. 527

(19) *Ibid.*, p. 535

(20) *Ibid.*, p. 534

(21) *Ibid.*, p. 555

(22) BOVET(E.), "Le Réalisme de Flaubert", *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 1902, p. 6, p. 25-26

(23) *Ibid.*, p. 18-21

(24) *Ibid.*, p. 29

(25) *L'Education sentimentale*, Conard, p. 603-4

(26) *Ibid.*, p. 291

(27) *Ibid.*, p. 120-1

(28) *Madame Bovary*, Conard, p. 94

(29) *Correspondance*, Conard, t. v, p. 260

(30) THIBAUDET(A.), *Gustave Flaubert*, p. 151-152

Chronologie de "L'Education sentimentale"
Les citations sont faites d'après l'édition Conard.

Première partie

1840 Mi-septembre. 《Le 15 septembre 1840, vers six heures du matin》, un bateau emmène Frédéric à Nogent-sur-Seine, 《où il devait languir pendant deux mois, avant d'aller faire son droit》 à Paris. Première rencontre avec Mme Arnoux (p. 6).

Mi-novembre. 《Deux mois plus tard》, à Paris, première visite à M. Dambreuse (p. 27-28). La vue de la plaque "Jaques Arnoux" provoque un retour de passion pour Mme Arnoux (p. 29). Dégoût des études de droit: ennui, indolence (p. 30-31).

1841 《Au jour de l'an》, il envoie des cartes de visite aux Dambreuse,

mais il n'en reçoit aucune (p. 32). 《Ainsi les jours s'écoulent, dans la répétition des mêmes ennuis et des habitudes contractées》 (p. 35). Un soir, au théâtre du Palais-Royal, Frédéric aperçoit Arnoux avec deux femmes (p. 36).

《L'hiver se termina. Il fut moins triste au printemps》 (p. 37).

Eté. Après l'examen, Frédéric retourne à Nogent (p. 37).

Septembre. Retour à Paris (p. 37).

Décembre. 《Un matin du mois de décembre》, Frédéric fait connaissance avec Hussonnet et Dussardier, à l'occasion d'un attroupement (p. 38-47). Quinze jours plus tard, Frédéric est emmené par Hussonnet à "L'Art industriel", où il voit la femme qu'il a entrevue 《l'été dernier, au Palais-Royal》 (p. 47-52) —Une erreur de Flaubert. Les visites ponctuelles à "L'Art industriel" (p. 54).

1842 Janvier. Un jeudi, invitation chez Arnoux, où Frédéric rencontre Mme Arnoux de nouveau: le même jour arrivée et installation de Deslauriers (p. 61-71).

《Vers le milieu du mois de mars》, Frédéric et Deslauriers reçoivent des notes d'un restaurent (p. 77).

Août. Deuxième examen de Frédéric: l'échec. Mme Arnoux est à Chartres, son pays natal (p. 85-91).

Fin-novembre. Retour de Mme Arnoux (p. 95).

Décembre. 《Les dîners recommencèrent; et plus il fréquentait Mme Arnoux, plus ses langueurs augmentaient》 (p. 96-97). 《Une angoisse permanente l'étouffait》 (p. 99).

1843 (Mai-juin). Le 24, samedi, la fête de Mme Arnoux à Saint-Cloud; 《Les chèvrefeuilles et les seringas envoyaient dans la nuit des bouffées d'odeurs amollissantes》 (p.112-122).

Août. 《Jusqu'au mois d'août, il (Frédéric) s'enferma, et fut reçu à son dernier examen》 (p. 123). Mme Arnoux est encore à Chartres (p. 124). Quatre jours après, Frédéric part pour Nogent; le lendemain de son arrivée, confidence de sa mère:

la situation financière ne permet pas son retour à Paris (p. 128). Il voit alors ⟪une petite fille d'environ douze ans⟫ (p. 129). — Ici une petite inexactitude. D'abord, désespoir: puis renoncement (p. 130-132).

1845 Eté. Après la visite de son oncle, Frédéric et sa mère se taisent, ⟪comme il y avait cinq ans, au retour de Montereau⟫ (p. 137-138); le même jour le père Roque lui propose de le conduire chez M. Dambreuse, mais il refuse, parce qu' ⟪il n'avait pas un costume d'été convenable⟫ (p. 138).

Décembre ⟪Un jour, le 12 décembre 1845, vers neuf heures du matin⟫, Frédéric reçoit une lettre qui annonce la mort de son oncle, dont il hérite. ⟪Il sentait la tête lui tourner⟫ (p. 139-140). Le surlendemain, il part pour Paris (p. 143).

Deuxième partie

Mi-décembre. Le surlendemain de son arrivée à Paris, Frédéric trouve la nouvelle maison d'Arnoux, où il voit Mme Arnoux qui a ⟪sur ses genoux un petit garçon de trois ans, à peu près⟫ (p. 155).—Une petite inexactitude. Quatre jours après, Arnoux amène Frédéric au bal chez Rosanette (p. 164-183). Le soir, ⟪une autre soif lui était venue, celles des femmes, du luxe et de tout ce que comporte l'existence parisienne⟫ (p. 183).

(Ici Flaubert franchit un an précis par négligence.)

1847 Janvier. Frédéric s'achète une maison (p. 184). Un jour de réception chez Dambreuse, il entend les mots: ⟪les Montcharron ne reviendraient pas avant la fin de janvier⟫ (p. 186). Le lendemain chez Arnoux, il dit à Marthe: ⟪Voilà une jeune personne qui est devenue bien grande depuis trois ans!⟫; et après, Mme Arnoux lui demande: ⟪Il (Arnoux) vous a mené au bal, l'autre jour, n'est-ce pas?⟫ (p. 192-193). La crémaillère de Frédéric; au cours de la conversation, ses amis évoquent

les ⟪événements contemporains: les mariages espagnols, les dilapidations de Rochefort, le nouveau chapitre de Saint-Denis⟫ (p. 198).

⟪Bientôt Frédéric hanta à la fois⟫ chez Mme Arnoux et chez Rosanette.

Février. Arnoux achète un cachemire pour Rosanette (p. 211). Après plusieurs visites chez elle, Frédéric fait faire son portrait; ⟪la chaleur du poêle⟫ fait promener Frédéric et Rosanette; ⟪il faisait un beau temps, âpre et splendide⟫ (p. 216). Ce soir-là Deslauriers, qui veut publier un journal, le fait écrire au notaire de lui envoyer de l'argent (p. 221).

Début mars. Chez Arnoux, Frédéric est témoin d'une scène de ménage, dont la cause est le cachemire qu'Arnoux a acheté ⟪l'autre mois, un samedi, le 14⟫ (p. 237).

Mi-mars. Frédéric prête à Arnoux l'argent que Deslauriers désirait, et Arnoux ne le lui rend pas; la brouille de deux amis; ⟪la nuit était sombre, avec des rafales de vent tiède⟫ (p. 263).

Avril. Mme Arnoux vient chez Frédéric, et le prie de déconseiller à M. Dambreuse de poursuivre Arnoux. ⟪On était aux premiers jours d avril. Les feuilles de lilas verdoyaient déjà⟫ (p. 268). Trois semaines après, à Creil, Frédéric laisse entendre à Mme Arnoux combien il l'aime, mais elle le repousse (p. 284-287).

Mai. Frédéric, choqué par un mot que Cisy dit de Mme Arnoux, le provoque en duel. ⟪C'était le mois de Marie⟫ (p. 318-319).

⟪A la fin de juin⟫, les actions du Nord connaissent une hausse considérable (p. 336). Réconciliation avec Deslauriers (p. 344-345).

⟪A la fin de juillet.⟫ Baisse des actions du Nord; la fortune de Frédéric diminue. Il rentre à Nogent sur l'instance de sa mère pour son mariage avec Louise (p. 346).

Août. Un jour, Deslauriers rend une visite hypocrite à Mme Arnoux. Restée seule dans la chambre, elle prend conscience de son amour pour Frédéric (p. 352-356). 《La même après-midi, au même moment》, Frédéric et Louise se promènent: 《En moins d'un an, il s'était fait dans la jeune fille une transformation extraordinaire qui étonnait Frédéric》 (p. 360).

Fin-août. Retour à Paris, avec la résolution d'oublier Mme Arnoux (p. 365).

Automne. Déclaration de son amour à Mme Arnoux (p. 386-387). Des confidences délicieuses à Auteuil renforcent leur amour spirituel; 《des cimes d'arbres jaunies par l'automne se mamelonnaient devant eux》 (p. 390).

1848 Janvier. 《Les embarras du jour de l'an suspendirent un peu leurs entrevues》 (p. 393).

Mi-février. Eugène est malade. Frédéric prend un rendez-vous avec Mme Arnoux (p. 394-395).

Le mardi suivant (le 22); la maladie d'Eugène s'aggrave; Frédéric attend Mme Arnoux en vain. C'est le jour du banquet du Douzième arrondissement: la manifestation, puis l'émeute, provoquées par l'interdiction du banquet réformiste (p. 397-405).

Le lendemain (le 23). Le soir, Frédéric et Rosanette sortent dans la rue; ils entendent un coup de fusil dans le boulevard des Capucines; la même nuit Rosanette devient sa maîtresse (p. 406-408).

Troisième partie

1848 Le 24 février. Révolution. 《Le magnétisme des foules enthousiastes》 prend Frédéric (p. 420).

Mars. M. Dambreuse lui conseille de poser sa candidature aux élections pour l'Assemblée nationale (prévues le 23 avril), et Frédéric compose un discours socialiste (p. 426-427 et 429).

Avril. Au lieu de Frédéric, M. Dambreuse se présente aux

élections et devient député.

Juin. Le 22 juin, désordre du peuple, entraîné par la proclamation de la fermeture des ateliers nationaux (p. 457-458): le 23 juin, Frédéric et Rosanette partent pour Fontainebleau (p. 459); le lendemain (le 24) ils visitent le château et ils sont informés, le soir, ⟪qu'une bataille épouvantable ensanglantait Paris⟫ (p. 464). C'est le début de l'Emeute de Juin. ⟪Le lendemain (le 25) ils allèrent voir la Gorge-au-Loup...; le surlendemain (le 26) ils recommencèrent au hasard...⟫ (p. 464) Ils vont ⟪un jour⟫ à mi-hauteur d'une colline... (p. 467); ⟪un jour⟫ elle dit son âge (p. 470); ⟪un jour⟫, les confidences plus intimes (p. 470); ⟪enfin un jour⟫, elle souhaite faire dire une messe, pour que ça porte bonheur à leur amour (p. 475). (On dira que nous sommes ici à la fin de juin, ou au mois de juillet, mais il n'en est réellement pas ainsi.) ⟪Le dimanche matin (en réalité, c'est le 25 juin), Frédéric lit dans un journal, sur une liste de blessés, le nom de Dussardier⟫, et il retourne à Paris (p. 475). —Ici, il y a donc une contradiction de la part de Flaubert.

Début juillet. Dîner de Dambreuse. Frédéric est pris d'admiration pour Mme Dambreuse (p. 488-502). Mais ⟪il prit l'habitude insensiblement de vivre chez Rosanette⟫ (p. 505).

1849 Fin-janvier ou février. Visite à Mme Arnoux; en route Frédéric rencontre un révolutionnaire, Compain, qui tonne contre la proposition Rateau (présentée le 8 janvier, et adoptée le 29) (p. 510). Le même jour il apprend que Rosanette est enceinte (p. 516). Répugnance pour Rosanette et désir de conquérir Mme Dambreuse (p. 518-519, et 524).

1850 Mai. Le mariage de Martinon et de Cécile (p. 524). Le lendemain, Frédéric confesse son amour à Mme Dambreuse (p. 525-526); le soir, informé qu'un siège de député est vacant dans l'Aube, il se décide à poser sa candidature (p. 530).

⟪Durant tout l'hiver⟫, Mme Dambreuse le traîne dans le monde

(p. 535).

1851 Janvier. La révocation du général Changarnier (janvier 1851) rend M. Dambreuse malade (p. 537).

《le 12 février》, la mort de M. Dambreuse (p. 538-539); le lendemain, les funérailles. Le jour suivant, Frédéric voit Mme Dambreuse découragée, car elle n'a aucun héritage de M. Dambreuse (p. 550-551); le même jour, l'accouchement de Rosanette (p. 552).—Une inconséquence très grave. Quelques jours après, Frédéric apprend que deux nouvelles candidatures lui ôtent toutes les chances (p. 554). —Une autre inconséquence.

Mi-juin. Les embarras d'argent (p. 562).

Automne. Rosanette gagne son procès avec Arnoux (p. 574). Le même jour, la maladie de son enfant; le lendemain matin, la mort de l'enfant (p. 574-575). Le déménagement secret de M. et Mme Arnoux (p. 582).

《Vers la fin du mois de novembre》, Frédéric aperçoit, contre la porte de la maison de Mme Arnoux, une affiche de vente aux enchères (p. 587); la rupture avec Rosanette (p. 590).

Le premier décembre. Le jour de la vente du mobilier de Mme Arnoux, Frédéric dit adieu à Mme Dambreuse (p. 596).

Le 2 décembre. 《L'état de siège était décrété》 (p. 596). C'est le coup d'Etat de Louis Napoléon.

Le vendredi matin, Frédéric part pour Nogent, où il voit le cortège du mariage de Louise et de Deslauriers; le soir, à Paris, Dussardier est tué par Sénécal, devenu agent de police (p. 597-599).

*

Des années passèrent; et Frédéric supportait le désœuvrement de son intelligence et l'inertie de son cœur (p. 600).

《Vers la fin de mars 1867, à la nuit tombante, comme il était seul dans son cabinet, une femme entra》 (p. 600); c'est Mme Arnoux elle-même.

《Le commencement de cet hiver.》 La conversation de Frédéric et de Deslauriers.

LISTE DES OUVRAGES CONSULTES

1. Œuvres de Flaubert

L'Education sentimentale, Paris, Conard, 1910.

L'Education sentimentale, Paris, Garnier, 1964.

Madame Bovary, Paris, Conard, 1910.

Madame Bovary, Paris, Garnier, 1964.

La première Education sentimentale, Paris, Seuil, 1963.

Ecrits de Jeunesse, (Mémoire d'un Fou, Novembre), Lausanne, Rencontre, 1964.

Correspondance, Quatrième série, Paris, Conard, 1933.

Correspondance, Cinquième série, Paris, Conard, 1933.

Correspondance, Sixième série, Paris, Conard, 1933.

2. Critiques

BOVET(E.), "Le Réalisme de Flaubert", Revue d'Histoire littéraire de la France, 1911, p. 1-36.

BOURGET(P.), "Gustave Flaubert", Essais de Psychologie contemporaine, Paris, Plon, 1920, p. 129-196.

GAILLY(G.), L'Unique passion de Flaubert, Paris, Le Divan, 1932.

PINATEL(J.), "Notes vétilleuses sur la Chronologie de L'Education sentimentale", Revue d'Histoire littéraire de la France, 1953, p.57-61.

POULET(G.), "Flaubert", Etudes sur le temps humain, Paris, Plon, 1949, p. 308-326.

THIBAUDET(A.), Gustave Flaubert, Paris, Gallimard, 1963.

3. Documents généraux

DAUTRY(J.), 1848 et la IIe République, Paris, Editions Sociales, 1957.

BASTID(P.), Doctrines et Institutions politiques de la Seconde République, Paris, Hachette, 1945.

BERTAUT(J.), 1848 et la Seconde République, Paris, A. Fayard, 1937.

井上幸治他，世界の歴史　第12巻「ブルジョワの世紀」，中央公論社，1961年発行

生島遼一訳，フローベール全集　第3巻「感情教育」，筑摩書房，1966年発行

（大阪大学文学士）